

## 立造樓鐘釣天祐

伊藤 丈

享保十四年（一八二九）三月二十日、祐天上人廟墓の左空地に鐘鑄小屋を設け、その前面に幅七尺四方、深さ九尺の穴を掘り、二重枠の鑄形を納めて四方を土で突き固め、龍頭の部分に銅を流し込む口を開け、その左右に大きな湯釜を置いて、朝五時前から四時までかけ、鑄物師竹崎石見の指揮のもと、油釜の煮えたぎる銅を鑄形に注ぎ込み、釣鐘は鑄造された。

六代將軍家宣の十七回忌追善のため、釣鐘と鐘樓を祐天寺に寄進した正室天英院一位大夫人は、その朝五時に名代として高山源右衛門を祐天寺に遣わし、鐘鑄小屋左に据えた棧敷で、竹崎石見と弟子が釣鐘を鑄る様子を見分させた。

鑄場の入口右の法要場では、祐天寺の衆僧が『阿弥陀経』と念仏を絶え間なく称えている。鑄場の周囲十間四方には、竹組みの塀がめぐらされ、松平讃岐守配下の小笠原喜之丞が率いる、足軽十六人がその内側で警護に当たると。

鑄場と阿弥陀堂の脇には「御用御鐘鑄場」の、鐘鑄小屋の前には「御用御釣鐘

堂普請場」の大幟が、それぞれ数本はためく。

二十一日、祐天寺近隣の人々も手伝い、いよいよ土中から釣鐘が掘り出される。折よく鑄場前の道を牛車を通った。ただちにその牛の力を借りて、ついに総高六尺余の釣鐘が土中から姿を現わした。目方は四百五拾貫、口径三尺余、上野寛永寺のと同じ大きさである。

翌日、祐天寺から一位大夫人へ、釣鐘鑄造成就の報告がなされ、二十三日、祐海が試し撞きした。湯釜に残余の銅で、三寸三分の阿弥陀如来像が作られた。

釣鐘の鑄造と鐘樓建立は同時に進行した。四月四日に鐘樓の上棟式が執り行われ、鏡餅三飴、洗米、神酒三対、掛銭二貫文、薪餅千箇、薪銭三貫三百三拾三文、白米三升、弓矢などを供え、棟梁の口上が済むと、式衆の僧が経を称えて念仏回向し、式後、棟梁らに一汁五菜、酒膳ほかを振舞う。

十四日より十六日までの三日間、快晴の大空の下、すでに釣鐘を掛けた鐘樓に

葵紋つきの紫縮緬の幕が張られ、祐海を導師に六十余僧が釣鐘鑄造の残り銅で造像した三寸三分の阿弥陀如来を、供養仏として輿に乗せ、それを先頭に本堂から鐘樓へと荘厳な練行を奉修する。当日、一位大夫人の代参秀小路が、釣鐘の撞き初めを勤めた。練行の三日間、関係諸寺院、大奥、武家、町方、名主、鑄物師、彫刻師、大工、石工、さらには百万遍講中、千部講中など、およそ二千余の参列者で境内は賑わった。